第5回　実践場面を科学する―こんな時どうする？Ⅱ
～噛んだり、叩いたり…激しい行動が多い～

講師　岡村　由紀子 氏

はじめに

褒めることを手段化したら、相手の心には届きません。褒めるというのは、保育者が、“素敵。すごいな”と思った心の声を呟けばいいのです。「えらいね。」などの評価語ではなく、絶対評価として、「素敵。」「素晴らしい。」という声をかけます。こうすることで子どもは、自分が認められたと感じ、心に落ちていきます。「えらいね。」となると、“私はあなたの行為を評価しているよ”という声掛けとなり、子どもは、評価してもらうために行動しようとしてしまいます。自分の中に自分の素敵さが積み重なりにくく、いつも大人に褒められようとしてしまいます。

保育者の一言は、大きな意味を持つのです。

１　逃げ出すほど音に敏感な子ども

人間が生まれた時、発達が一番ゆっくりな部分は、視力です。外界に出て、光を浴びることで、視力は上がっていきます。聴力は比較的発達が早いですが、自分の中で、必要な音を聴くという調節が難しく、雑音も同じ音量で聴こえてしまい、苦しむ子どもがいます。

（事例）Ｉちゃん（３歳・年少児）は騒がしい雰囲気、賑やかな雰囲気が苦手です。保育者が「大丈夫だよ。」と声をかけても落ち着きません。ピアノの音が鳴る前に予告したり、音に慣れさせたりすることも、よくある対応です。

この場合、大丈夫かどうかを保育者が決めるのではなく、本人の気持ちに寄り添い、Ｉちゃんが大丈夫と感じられるような状況を作ります。自律的に自分をコントロールできるようになることが、キーワードです。すべての行動は自律的であることが、人間として生きる力です。他人から「ああしなさい、こうしなさい。」と言われて行動するのは、他律的です。音に慣れるように、保育者が一方的に訓練するのではなく、子どもがさまざまなことに楽しさを実感する中で、結果として音に慣れる、これが発達です。人間は人から言われて変革する動物ではありません。自己創出していけるような環境で、自ら変わっていくのです。その環境を創っていくのが、指導です。特に乳幼児期は、文字教育ではないので、ここが問われるのです。

指導のポイントは、とにかく共感することです。子どもが自分で言えなくても、保育者が子どもの行為に言葉で意味を添えていきます。それがぴったり合うと、やがて子どもはその言葉を使い、嫌だった時の自分の気持ちを表現していくようになります。言語で表現ができたら、人とのコミュニケーション能力は上がっていきます。保育者が言葉を添え、周りの子どもが寄ってきた時には、仲間が“ちがい”を理解するチャンスになり、子ども達の他者理解の力が上がっていきます。己の持つ力、自分の得意、不得意を知り、それらを感じながら生きていく中で、子どもは、自分で解決方法を見つけ出す方法を考えていきます。

環境としては、ちがっていることを否定しないあそびの場を、別のところで保障していきます。

独自の行動で多いのは、「音」のほかに「食」があります。味覚の発達は一生続きます。子どもは好きな人が食べている物に関心を持ちます。舌に乗せ

た経験があり、味を覚えていること、周りの人がおいしそうに食べていることが大切です。幼児期だけで変わることを期待するのではなく、いつか変わるという知識を頭に入れ、先を見通して、食べることは楽しいことであると知らせていきます。

２　注意しても、よく噛みつく

（事例）Ｒちゃんは、言葉の発達がゆっくりです。にこにこしながら友だちと遊びますが、よく噛みつきます。噛みつき以外の関わり方を教えたり、親子関係に注目したりすることが、よくある対応です。入園すると、集団場面になります。だからこそ、この行動が気になります。

静岡大学 金田利子名誉教授によれば、気になる子がいる場合の課題として、次の 5 点が挙げられます。①保育に問題がある（計画がきちんとあり、枠組みが固い保育）②保育者自身に問題がある（保育者の指導法による）③家庭に問題がある（一番は虐待）④宗教・文化の違い⑤その子自身の中にある。この事例は、⑤のその子自身に課題を持っているケースです。

表現の仕方は、言葉だけではありません。０，１歳児は言葉が十分ではないため、表情や目の動きなどで、その子を捉えることが自然にできるのですが、２歳くらいになり、言葉が生まれてくると、その言葉で子どもを理解しようとしてしまいます。実は噛みつきも子どもの心の表現の１つです。

噛みついたときに、制止しつつ、「貸して。」を教えることはよくありますが、この指導の前に、噛みつかざるを得なかった子どもの気持ちをくみ取り、保育を創っていくことが大切ではないでしょうか。子どもの行為には１００％理由があります。噛みつきという行為だけを見てしまうと、言葉だけでの指導になります。親子関係に問題があるとしても、そのことと子どもの行動の原因を直接的、短絡的に親の養育態度に求めるのはどうなのでしょう。まずは日々の保育の見直しが必要ではないでしょうか。今の日本の世の中、保育所に依存する時間が長いのが現状です。家庭での密着した親子関係のように、集団といえども、園でも保育者と子どもの間で丁寧につくりあげていくという、質の高い保育が求められています。登園から降園まで１１時間も園にいる子どもの、家庭での親子関係を責めるより、長時間の在園時間を子どもにとって充実した保育にしていく方が、効果が高いと思います。親を変えることは難しいです。それよりも在園時間を、子どもの発達保障ができる状況にしていくのです。

ともかく、噛みつきが起こりそうな場面では、共感する言葉をかけます。そうすることで、間ができ、子どもの高まっていた気持ちが少し落ち着いてきます。ひどそうな時には、保育者が体で割って入り、今のような関わりをします。１回で魔法のように変わる方法はありません。繰り返しの丁寧な経験を、子どもの中にたくさん積み重ねることで育つ力であることを、私たちは理解していかないといけません。

未満児の場合は、「自我」という「やりたい自分」が出る時なので、けんかも多いです。自我を豊かにするためには、玩具は人数分揃えるなど、物の環境を見直し、つくっていくことが大事です。

不適切な表現に対しては、叱責や注意ではなく、共感的に関わる保育者の対応が重要です。子どもを人間として育てる仕事ですから、保育者の感情で子どもに向かうのではなく、ここにいる子どもが人間として育っていくためには、どうしたらいいかを考えます。「貸して。」と言えばいいのに、コミュニケーションがうまく取れずに噛んでしまうことで、叱られたり、周りからいろいろ言われたりしてしまいますが、視点を変えると、一番苦しいのは、噛まなければならない子どもです。この子が、自分の思いを言語で言える力をどうつけてあげたらよいか、ということを保育者は考えていく必要があります。

３　友だちを叩いては楽しそうに笑う

（事例）Ｓちゃんは、日頃から落ち着きがありません。それ以上にすぐに友だちを叩いて笑うことが気になります。事前にやってはいけないことを知らせる、保育者が怒っていることをわかりやすく表現するなど、大人が決めたルールを一方的に守らせるという対応をよくしますが、これは無理があります。相手を叩くのには、必ず理由があります。その理由を探ってみてもいいのではないでしょうか。また、その子に声をかけるのが、注意するときばかりになってはいないでしょうか。制止する声掛けが中心になっていませんか。こういうこと（不適切な行為）をしたら、自分の方を向いてくれると思わせていませんか。この子の好きな遊びを知っていますか。友達を叩くことより、もっと楽しいことがあることを、この子に知らせていく必要があります。人に関心がない子は、人のそばに寄りません。人の物を壊さない、人の物を持って行かない、何もしません。人への関心が始まり、友だちに関心をもつ姿が、不適切な行為として表れることがあります。やっと人に興味が出てきたということです。

トラブルは、子どもが他者との関わり方を学ぶチャンスだと考えます。困った行動の裏には、他者に関心を持ったからこその姿があります。だから、遊びを豊かにして、“一緒にいると楽しいね”と、気持ちと言葉が重なるように働きかけます。怪我にならないためには、不適切な行動を見たら、必ず体を入れ、行動の奥にある子どもの心を大切にして、言葉を添えます。危険な環境は取り除きます。大人の行為を見て、子どもは学んでいるので、その子をみんなの前で叱るなどの行為では、個も集団も育っていきません。気になる子が、特に人間関係、コミュニケーションを求めるとき、ものすごく不適切で、ずれた行動をします。１，２歳児であればかわいい行為で済むのですが、これが年齢が上がってきてから見られると大人は落胆します。しかし、発達しているからこそ、見える姿と捉えることが大切です。

４　乱暴な言葉や、酷い言葉を出す

（事例）普段一人で遊ぶことが多いマイペースなＥちゃんは、自分のペースが崩されることを言われると、「おまえなんか埋めてやる、このブタヤロウ！」と酷い言葉を言います。このような時「ブタヤロウとは言いません。」と、絵や文字で書いて、ルールを明確にする対応をすることがあります。

遊びの終了時間と、熱中時間の関係を調べる研究（首都大学 浜谷直人教授）があります。その調査では、保育者が遊びの終了の声掛けをした時、その子が、遊びのどこにいるかが大きく影響することがわかってきました。楽しさの山を越えている子にとっては、遊びの終了の声掛けは受け入れ易いが、今まさにという子や、これから活動に乗ってくる子にとっては、受け入れ難いのかもしれません。子どもが遊びを切り換えるとき、保育者の声をかけるタイミングがどこかということなのです。小学校の４５分授業で集中するということとは違い、保育所、幼稚園は乳幼児期なので、子どもが“終了”を受け入れられるまでにはいろいろあって、だんだんと受け入れられるようになればいいわけです。

言ってはいけない言葉をルールとして明確にする指導は、一方的という意味では、叱りつける保育と同じです。このような指導の前に、その子がそう言わざるを得ない理由を見つけることが先ではないでしょうか。その子にはその子のリズムがあるのです。子どもの遊びの山を知る努力が必要です。

ソーシャルスキルトレーニング（SST）という手法もありますが、これは本人が、「こういう言い方をやめたい。」と自ら願ってはじめて、効果を発揮するものです。必要な時に必要な言語を学ぶためには、保育所や幼稚園の生活や遊びの中で伝えていく方が自然です。乳幼児や、コミュニケーションが取れない子であればあるほど、のりしろ、幅があって

いいのです。

暴言を頭ごなしに怒っても、子どもの心は開きません。遊びを続けたい一心で暴言を吐く、子どもの心に寄り添って、「まだつくっていたいんだね。」と伝えると、子どもの高まった感情に間ができ、子どもは落ち着きます。保育者の「わかったって言えばいいんだよ。」の言葉が、心に届きやすくなります。暴言を吐くときは、強い拒否感の表れであること、感情にふさわしい言葉を本人が持っていないことを保育者は知っておき、その場面での即効薬はないけれど、日頃の保育の中で、丁寧な言葉遣いや、感情の出し方などの、モデルになるような生活を心掛けるようにしましょう。

もう１つ大切なのは、周りの子どもの心に気持ちを寄せることです。暴言に対して「こわいな。」と思う心を「そうだね、こわいね。」と、わかってくれる大人がいたら、今は言えなくても、やがて、「そういうのはいやだよ。」と暴言を吐く子に対して言える子が育ちます。今は保育者に、共感という形で、自分の中に言える力の土台を育ててもらっているのです。大事にされているという共感は、両方の立場の子どもにメッセージとして送られているのです。

この子が自分で遊びを切りあげていくのは、なかなか難しいです。暴言を吐くというのは、場に適した言葉がわからないとか、自分がこう言ったら、言われた相手がどう思うかがわからないからです。おおむね４歳児くらいの自己コントロールの形成が弱いと思います。自己コントロールの形成が弱いと、人とのコミュニケーションの中でも、乱暴な言い方をしてしまいます。そして、この子の周りには友だちが寄ってこなくなり、あの子は特別なおかしい子、嫌な子、いつも先生に怒られている子という、特殊な子という印象を与えてしまいます。

この事例で、指導は二方向あります。１つは個に向かっての指導、もう１つは、集団に向かっての指導です。集団の質が上がってくると、子どもの発達の育ちが大きくなります。質が下がると、育ちは小さくなってしまいます。

今回の子ども達の事例は、人を傷つけてしまったり、困ったりするような、どちらかというと破壊的であり、クレームが来てしまうようなものです。指導するのは保育者ですが、保育者と子どもだけで掛け合っているわけではありません。問題を、集団に落とし、集団の中で解決するようにしているのがわかると思います。

いじめを止められないのは、大半の子が、いじめを傍観しているからだと言われています。いじめ問題の専門家は、「やられている子に問題はない。やっている子にはもちろん問題や課題がある。しかし一番は、それを見ている子たち、“友だちがいじめられているのに、止められない集団”に問題がある。」と言います。いじめをなくすには、きちんと意見を言える力を持った集団を育てていくことが大事です。それには、事例のように自分が大事にされる経験、「どんなあなたも大事よ。」と受け止められる中で、子どもの勇気が立ち上がり、「そういう言い方はいやだからやめて。」ということを言えるようにしていくことが大切です。みんなが言ったら、いじめる子はやっていられなくなります。しかし、先生が個に指導をしていたら、集団が育っていきません。先生がいないところでいじめをやってしまい、どちらの側も発達していきません。その場所が楽しくない場所になってしまいます。

終わりに

指導の二方向という視点で、今回の事例も、来月からの事例も読み取っていってもらいたいです。次回も事例を詳しくみていきたいと思います。

そして、第８回では、集団の指導をどのようにつくっていくかという話をします。

第５回　焼津市保育者資質向上研修会
平成２９年１１月８日（水）
会場：焼津公民館